自由南アフリカの声

Voice of Free South Africa

～１冊の本が人生を変える～

2011 年 2 月

No. 55

発行　／　アジア・アフリカと共に歩む会

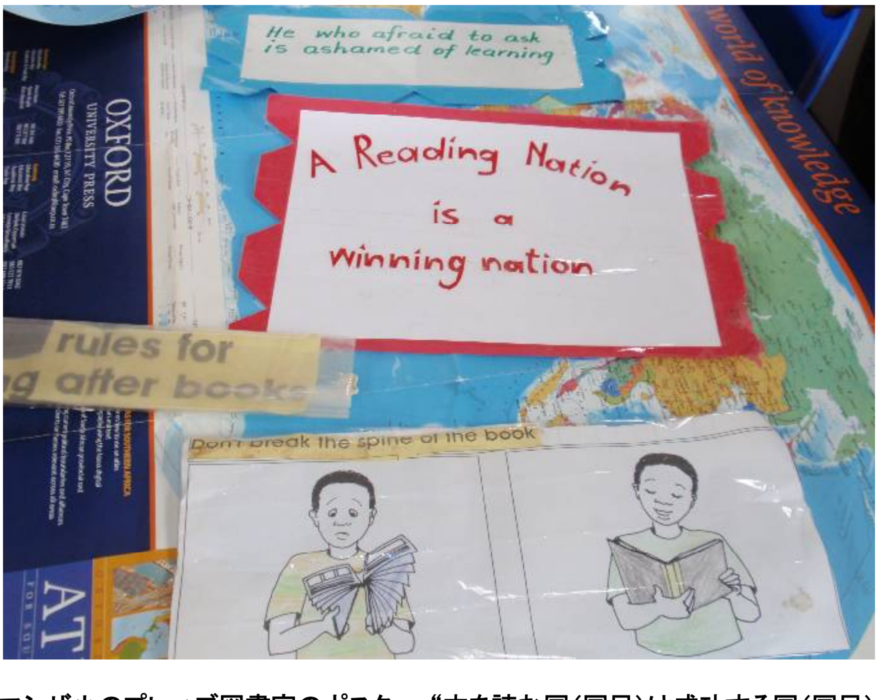
Together with Africa and Asia Association(TAAA)

２０１１年２月までの報告

- ■ 9月　JICA 地球ひろばにて TAAA 活動報告会
  本13466冊とサッカーボール等を南アへ送付
- ■ 10月　グローバル・フェスタへ出展
  南ア TAAA 代表平林薫、南アへ戻る
- ■ 10月～2月　南アにて農業プロジェクト実施
  南アにて図書・移動図書館プロジェクト実施
- ■ 12月　平林薫、一時帰国
- ■ 1月　さいたま市にて TAAA 活動報告会

目次

南アフリカの近況と帰国報告（平林薫）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
TAAA 活動報告会（鯨井幸一）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
私たちの地球～ともに生きる（渡部隼人）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
ひとこと（髙野千恵美・中地明子）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
エルギン学習基金訪問記（牧野久美子）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
南アフリカ用語解説　第１回　［虹の国］（鯨井幸一）・・・・・・・・・・・・・・１０
主な活動・ルイボスティ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１
寄付・会費・本などを下さった方々・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１２



マシザ小のプレハブ図書室のポスター “本を読む国（国民）は成功する国（国民）だ”

2011 年 1 月 9 日　　# 南アフリカの近況と帰国報告

TAAA 南アフリカ事務所代表　　平林薫

南アに住んで１４年。アパルトヘイトを終わらせ、民主的な国家として再スタートした南アの変化を見てきた。今でも魅力的な国だし、これからどうなっていくのか楽しみではあるが、それだけに変化の質に疑問を持ったり、抱えている問題をどう対処すればいいのか考えたりしている。南アは良くも悪くも確実に世界経済の大きな流れの中に巻き込まれている。

右：ダリボ小の１年生と平林薫

１．南ア近況

スタジアムに黒人がいない

2010 年のハイライトは何といってもワールドカップ。昨年前半は大イベントの最終準備に集中し、6 月中旬から一ヶ月の本番が終了した後、ワールドカップの余韻に浸る間もなく、公務員のストなど現実に引き戻された感じだった。開催前に“全くだめだろう”と言われていた南アチーム“バファナ・バファナ”の健闘で、普段サッカーにはあまり興味のない人たちまでサポート T シャツを着て応援し、ほんの一瞬ではあるが、国が一つにまとまったような感じだった。スタジアムに観戦に行ったが、サンディーレは観客を見まわして、“No blacks”と居心地悪そうにつぶやいた。チケットの価格が高いこと、購入の仕方が複雑なことから、開催されている地元の人々が入れない状況。もちろんアフリカ人でも、政府関係者や大企業に勤めるエリートたちは特別席に座り、私たちのような天井にくっつきそうな席にはいない。あの一瞬の夢のようなイベントのためにどれだけのお金が使われたことか。目に見えることだけでなく、人々や子供たちの心の中に、“自分の国でワールドカップが開催されたけれど、スタジアムに見に行くこともできなかった”という現実が残り、“お金持ちだけが楽しいことができて、素敵な服を着て、美味しいものを食べられる”という意識をますます強く持つようになってきている。それでどんなことをしてでもお金を得たいという、極端な拝金主義に走ることになる。

フェラーリに乗る黒人

今、南アのメディアを賑わせている 2 つの事件は、このような社会状況を反映している。一つ目はある黒人の有力なビジネスマンの盛大なお誕生日のパーティー。この人物は時代の変化にうまく乗って富を手にした人で、インタビューでは愛車フェラーリから登場し、“自分で稼いだお金はどのように使おうが文句を言われる筋合いはない”と言い放った。このパーティーではアメリカではすでに流行っている、ほとんど裸の女性の身体の上にお寿司を並べて食べるというイベントを行ったのだが、彼曰く“南アでは初めて。私は流行の先端を行っている”このパーティーには政界の有力者も招待され、この話が南ア労働組合ヴァヴィ事務局長の耳に入った。その後の演説で“今日一日食べられるかという厳しい状況の人々が大勢いるのを知りながら、そんな贅沢なパーティーを開いてよく平気で飲み食いすることができるものだ。まして、裸の女性の身体の上に並べた寿司を食べるなど何てハレンチな。恥を知れ”と批判したことから論争に発展した。また、金持ちの男性と結婚、離婚を繰り返し、お金だけを追いかけているような若い黒人女性がメディアでもてはやされ、自分をセレブと呼ぶ勘違いに南ア社会の変わりようを見る。

２０万円で殺人を引き受ける

もう一つの事件はまだ捜査中なのでメディアの報道からの情報。11 月初めにインド系イギリス人とインド系スウェーデン人の新婚カップルがケープタウンでのハネムーン中に、カエリチャ黒人居住区でカーハイジャックに遭って女性が殺害された事件があった。そのニュースを聞いた時の私たちの反応は“男性はかすり傷一つなく、なぜ女性だけが殺されたのか。何かよほどの理由がない限り、殺す必要はないのではないか”捜査が進む中、男性はすぐにイギリスに帰国した。その後、カップルを案内したドライバーが逮捕され、お金をもらって暗殺を手配したことを告白したときには、やっぱり、という印象だった。その金額が 15,000 ランド（約２０万円）。お金を得るためには何でもする、恐ろしい世の中になってきている。

お金が問題を引き起こす

これまで報告会で何回かお話ししたが、１０年くらい前にジョハネスバーグのストリートキッズだった１２歳のエルビス君が、“お金はいつも問題を引き起こすんだ。僕が神様だったらお金をなくしたいよ”と言ったことが忘れられない。幼い子供がすでにお金の恐ろしさ、醜さを知り、お金に対する憎しみを持っていることにショックを覚え

た。

人種格差から経済格差へ

南ア社会でかつては人種による格差だったものが、今では経済的な格差となって人々の生活のすべてに影響を及ぼしている。お金がなければいい学校に通えないという教育の格差は、質の高い教育を受けられなかった若者は安定した職に就くことができないため、結局貧困から抜け出ることができないという悪循環を引き起こす。また、情報の格差も問題で、テレビやインターネットなどのメディアにアクセスできない人々は十分な情報が得られないばかりか、悪意があった場合、間違った情報を流したり、情報をコントロールしたりすることもできる。

２．TAAA の活動

楽しい活動

TAAA は現在クワズールーナタール州の２つの地域で活動を行っているが、私はプロジェクトサイトを訪問してそこに住む人たちに会うことがうれしくて、活動も楽しくて仕方がない。楽しいとやる気も出るし、“私はあなたたちと会えるのがうれしいんです”っていう気持ちは相手にも伝わると思っている。私は特にクワズールーナタールへの思いが強いので、南アのことをお話しするとき、ちょっとひいきめだったり、他の地域には当てはまらないこともあると思う。

政府の方針に沿った TAAA 活動

クワズールーナタール州は大きな州で人口も多く（南ア人口約 5,000 万のうち約 1,000 万）、圧倒的にルーラルな地域が多いため、開発は遅れている。そのため、失業率もとても高く、生活に困窮している家庭が多いことから様々な問題を抱えている。しかし、広い土地や気候も良いなど地域としてのポテンシャルが高く、人々もきっかけさえあれば十分にパワーと能力を発揮する可能性をもっている。何といっても現大統領ズマ氏はクワズールーナタールの遠隔地の出身のため、地元の発展は優先課題といえる。これまで遅々として進まなかったインフラの整備や、無償もしくは低価格の住宅の建設が急ピッチで進んでいる。しかし、彼は決して自分の地元だけをひいきしているわけではなく、南ア全土で遠隔地の開発と、そこに住む人々へのサービス向上をやっと真剣に取り組んだといえる。柱としては、水道・電気・道路などインフラの整備、農業による遠隔地の開発、教育・保健分野の改善。私たちの活動は基本的に政府の方針に沿っていることを確信している。

グループのリーダーが本読みを確認して担任に報告するマゴンゴロ小

a. 移動図書館と図書室支援

図書館車の４０校巡回と読書指導

TAAA の活動の一つは２００９年４月からボランティア貯金の助成金で、移動図書館車を利用した学校図書活動支援プロジェクト。現在はンドウェドウェ地域の小学校４０校を巡回訪問している。州教育省もバスを巡回させていて、最大でも２０校までというが、私たちの活動では図書システムのソフトを使うことで貸出し・返却がスムーズに行えることから学校数を増やすことができた。今でも図書室がなく、本にアクセスできない学校が数多くある状況下では、とにかく図書活動をスタートさせることが最優先だと考える。プロジェクトではバスで学校訪問をして本の貸出しをしながら、学校図書室の設置を支援している。今年度はスペースのない学校に改装したコンテナーを寄贈して図書室を開設した。ハード面での支援と同時に、本や図書室が有効に利用されるようになることがとても重要。そこで、教師を対象とした研修会を開催し、本の扱い方から基本的な分類、整理方法や本の管理、利用法などを指導した。3 月でプロジェクトが終了となるので、今期はファシリテーターと共に各校を巡回して、学校図書室の状態の確認と、学校での図書活動へのサポートとアドバイスを行う予定。

新たな学校からも巡回要請

活動の話は地域の学校関係者の間で話題になっているようで、少し前に新しい学校から活動に参加したいという問い合わせがあった。３月で終了してしまうと伝えるとがっかりしていたので、本を届けて、学校名と連絡先をリストに載せ、今後も機会があったら本や物資を届ける約束をした。今ではンドウェドウェの学校の先生方から直接携帯に連絡が入り、ダーバンでミーティングをしたり、一緒に出かけたりとパーソナルなお付き合いもできるようになった。このリストは会の宝物。ンドウェドウェの４０校の名前を覚えたところで、今度は新しい地域で２３校、3 つのコミュニティーとのつながりを作り始めている。

b. 学校を拠点とした農業促進プロジェクトが始まる

プンガシェ地域で農業グループに苗と農具を配布した

地元の農業専門家と協力

昨年７月から JICA 草の根技術協力事業として、州南部ウグ郡内の学校と地域で畑作りを行っている。農業専門家のリチャードさん、巡回農業指導員２名は黒人男性のニコラスさんと若い黒人女性のザコナさんで熱心に活動を行ってくれている。私自身もリチャードさんから有機農業について、また最近話題になっているスローフードの取り組みについて学んでいる。３地域はドゥドゥドゥという、一番ダーバンに近く、少し内陸に入った地域、ヒバディーンという沿岸地域、そしてプンガシェという一番町から遠い高地で、ここの教育センターをベースにしている。前回の JICA 草の根事業ではンドウェドウェの学校の敷地内に菜園作りを行ったが、今回は地域住民との活動があり、やる気を持った、すてきな人達に出会うことができた。

地域の特性を掴み問題解決へ

ンドウェドウェの活動の際にも、山をひとつ越えると土壌が変わったり、学校の立地条件で収穫にも多少の差があったりという経験をしたが、今回はより広い地域のため、かなり環境に違いがある。同じプンガシェ地域でも、肥沃な土地もあれば、土壌が砂のようだったり、粘土のようだったりする学校もあるため、たい肥を十分にやることで土づくりから始めた。クワズールーナタール州の沿岸には大農場のサトウキビ畑が広がっているが、土壌の調査を入念に行って最適な場所に畑を作ったことがわかる。アパルトヘイト時代に線が引かれたホームランドはもともとその民族が住んでいた地域ではあるが、その中でも特に農業には適さない、やせた土地を残したことがわかる。コミュニティー農園の 3 か所もそれぞれ地域性がある。ドゥドゥドゥは少し町に近いのでアクセスはいいが、近くに川もなく、水道設備も整っていないことから、乾期の灌漑が心配。すでにコミュニティーリーダーと共に村の役所に話はしているが、状況によっては井戸設置の支援も探っていきたい。プンガシェはセントフェイスという大自然の中の美しい地域。一年中涸れない川沿いのため、畑作りには適しているが、情報等から隔絶されたような遠隔地。ヒバディーンはサトウキビ畑の中を延々と走って“こんなところに家があるのかしら”という雰囲気。サトウキビ畑のすぐとなりなので土壌がよく、谷間なので畑作りには適している。近くにコミュニティーホールなど集まる場所がないため、青空ワークショップを行った。州農業省地域担当者のサポートもあり、作物の販売ルート開拓も始まっている。

地元に合った有機農業で

最初のミーティングの際に“プロジェクトでは家畜のふんなどを肥料に使うオーガニックな方法で作物を育てます”と話したところ、“いつもそうやってきましたよ”と笑われた。私たちが支援するのと同時に、私たちも彼らから学ぶことがたくさんあって、活動を通して地域の人々とつながりが深まっていくことが楽しみにしている。

ヒバディーン地域のジャガイモ畑で話すリチャード（中央）

ヒバディーンにて青空研修会の昼食

ＴＡＡＡ帰国報告会

～２０１１年1月9日（日）　浦和コミュニティセンター 第13集会室において～

鯨井 幸一

ＴＡＡＡでは、毎年、日本の皆さまに当会の活動内容を知って戴くため、当会南アフリカ事務所代表の平林薫さんの一時帰国に合わせ、報告会を開催しています。

当日は、ロケーションの良さ（浦和駅から徒歩１分以内）、天候にも恵まれ、３８名の方にご参加戴きました。

第一部は、平林さん（写真：上）に『コミュニティーの中心としての学校の可能性「本と畑」～自立に向けての図書支援活動、広がる菜園活動～』と題し講演して戴きました。まず、南アフリカの現状について報告があり、“拝金主義”が覆いつつあることを、最近の南アフリカで起こった、二つの話題を通してレポートされました。

次に、当会のプロジェクトの進捗状況についての報告がありました。まず、２０１０年４月～２０１１年３月の予定で実施されている、国際ボランティア貯金による助成事業『基礎教育支援のための図書配布、本棚・コンテナー図書室の配備』について。支援している４０校の現状について報告があり、教員に対する図書指導の教育に力を入れているとともに、本の数に対して、施設（本棚やブックエンド）が追いついていない現状。手を洗ってから本に触るなどのマナーについての教育にも力を入れているとのことです。また、図書室が足りない学校にコンテナー７個。プレハブ１個を寄贈したことも報告されました。

続いて、２０１０年７月～２０１２年１２月の予定で実施されているＪＩＣＡの助成金による『学校を拠点とした地域農業促進プロジェクト』についての報告がありました。

支援対象としている、３つのコミュニティーについて報告があり、菜園だけでなく“食育”活動にも力を入れているというレポート。また、一部コミュニティーでは、収穫した野菜を流通させるレベルまでに達しているという嬉しい報告もありました。

最後に、写真のスライドショーによる説明があり、一つのビスケットをみんなで仲良く分けて食べている写真がとても、印象に残りました。

第二部は、関西大学客員教授・（特活）アフリカ日本協議会理事・日本国際ボランティアセンター元南アフリカ現地代表 津山直子さん（写真下）による、『生物多様性を守る住民主体の農業～「ないもの」ではなく「あるもの」に目を向ける～』と題するＤＶＤ講演でした。

まず、アパルトヘイトが奪った黒人の、誇りと自信、尊厳を取り戻すため、「環境保全型農業」の構築に取り組んできた経緯が述べられました。

雨水などを使い「あるもの」を活かした農業の展開を目指し、環境と農業が対立しないよう、持続可能な取り組みの重要性を指摘されました。

現在、問題になっていることとして、ドナー政府（主に欧米）による『パッケージ援助』が挙げられました。種以外に、化学肥料、農薬、トラクターをセットとした援助です。しかし、農薬を使った農業は、土地を荒らし、結果的に収穫高の低下を招く現状が指摘されました。

また、遺伝子組み換えの種子による、農業の弊害が指摘されました。遺伝子組み換えの種子を使うと、従来種子を駆逐し、伝統的な農作が不可能になってしまう点が強調されました。パッケージ援助と同様、遺伝子組み換えによる農作は結果的に収穫高の減少を招くことは証明済みだそうです。

食料増産計画の名の下による、一方的な支援は、結果的に農作物の生産の減少を招くという、グローバリゼーションの問題を、特に強調されました。

津山さんは、その地にあった農業、化学肥料によらない有機農法による農業を支援し、それがいかに大切で、援助は現場の声を十分に反映させなければいけないことも、述べられました。

最後に、質疑応答が行われ、「W杯後のスタジアムの利用（稼動状況）はどうなっているのか」「南アフリカでは英語は何年生から学ぶのか、また、ＴＡＡＡが寄贈した本はどのように利用されているのか」「田舎に住む高学年になった子どもは、都会に住む子どもが簡単に得られる情報を、どのようにして得るのか」「南アフリカ

の学校の教師は資格が必要なのか。また、教師は人気のある仕事なのか」という質問があり、平林さんが一つひとつ丁寧に回答していました。

今回は、若い参加者も数多く見受けられ、南アフリカに対する関心の高さが窺えました。

南アフリカと日本の架け橋として、これからもＴＡＡＡの果たす役割の大きさに、身の引き締まる思いをした、報告会でした。

（写真左：報告会の会場）

私たちの地球～ともに生きる

算数セットや英語の本を集めて南アフリカへ

川口市立芝富士小学校　教諭　　渡部 隼人

本校では、6年生の総合的な学習において、「私たちの地球～ともに生きる～」という単元名のもと、「国際理解・環境・共生」をテーマとした学習に取り組んでいます。世界の国々や文化・地球環境の現状や地球の抱える問題についてなど、自分と様々なものとの関わりについて調べることを通し、これからの自己の生き方について考えを深めることがこの学習のねらいです。

１学期の初め、子ども達の知識はどの程度かを探るために、知っている国名について質問してみました。アメリカ・中国・ドイツ・エジプトなど、普段よく耳にする国名が挙がります。パリ・ローマなど都市と混同した回答や、中にはアジアという答えもありました。さらに、世界地図を見せ、それらの国がどこにあるのかを尋ねたものの、場所となるとほとんど答えることができない児童が多いというのが当初の段階でした。

そこで、まず「世界にはどんな国があるのだろうか？」という課題を出し、一人一カ国を選びその国について調べ学習を行いました。調べたことを模造紙にまとめ、一人一人みんなの前で発表します。こうすることで、一人の知識をクラスのみんなへと広げることができ、子ども達は世界の様々な文化や多様な価値観・考え方があることに気づくことができました。(6年１組は２６名の児童で、２６の国々について知ることができました。)

2学期には修学旅行で日光東照宮を訪れるため、事前学習を兼ね世界遺産(自然・文化)について学習をしました。自然や文化について関心を持ち、今後もこれらの遺産を大切にしようとする心を育むため、ここでも一人ひとりが興味を持った世界遺産について調べ学習を行いました。

また、ユニセフ埼玉支部のご協力をいただき、世界の貧困国の現状について出前授業をしていただきました。もし世界を１００人の村に縮めた場合、世界の富の６０パーセントを６人が持っていて、２０人でたったの２パーセントを分け合っていること。世界には食べることすらままならず、厳しい労働環境におかれ、学校にいくことができない子どもがいること。日本なら簡単に治せるような病気が原因で命を失う子が大勢いることなど、世界には恵まれない人達がいることを知りました。授業を学ぶ児童の厳しく真剣な表情が印象的でした。この頃になると、学習テーマに対しての知識や理解も深まり、児童にも、こうした世界の現状に対して問題意識が芽生え初めて来ました。授業後すぐに「先生、児童会で募金活動しましょう！」と行動に移そうとする児童も現れ、学習のねらいにもあるように、児童は様々な知識や理解を通し、そこに自分との関わりを考えるようになってきました。

その後の授業では、「自分たちが地球のためにできることは何だろうか？」を考え、環境問題や貧困問題に対し、以下のような取り組みを行うこととなりました。

グループ名	主な取り組み内容
環境問題啓発グループ	ポスターや手紙を作成し、全校や家庭への啓発活動をする。
貧困問題啓発グループ	ポスターや手紙を作成し、全校や家庭への啓発活動をする。
エコキャップグループ	全校へ呼びかけ、エコキャップを集め Co2 削減をする。
書き損じはがきグループ	全校へ呼びかけ、書き損じはがきを集め寄付する。
教具グループ	全校へ呼びかけ、使わない文房具や英語の本などを集め寄付する。

児童は、休み時間なども利用し全校への呼びかけ、手紙を作成するなど意欲的に活動に取り組んでいました。こうした児童の努力と芝富士小学校のみんなの協力により、多くの寄付品を集めることができました。これらの寄付品を“アジア・アフリカと共に歩む会”の皆様のご協力により、現地へ届けていただけることに感謝申し上げます。

学習後の感想では「最初は本当に協力してくれるか不安だったけど、みんなの協力の大きさに感動した。」「これからも自分ができることは、協力していきたい。」「私たちの送った文房具でいっぱい勉強してほしい。」「一人ひとりの小さな思いやりが大きな力となることが分かった。」など、思い思いの感想を述べていました。この学習を通し児童は、行動することの大切さ、行動を起こすことで多くの賛同や協力が得られることを実感することができました。また、環境問題や貧困問題など地球上の諸問題に対し、自分とは無関係なものではなく、一人の人間として、何かしらを感じ関心を抱ける心を養うことができたと思います。

ここで学んだことを児童が、将来も継続し活かせるようにすることが今後の課題です。よりよい社会を築くための一役を担えるよう、私たち芝富士小学校教職員も児童と共により一層の努力をしていきたいと思います。

～ひとこと～

■ はじめまして　　高野　千恵美

皆さんはじめまして。さいたま市在住高野です。前代表の野田さんとひょんな事からつながって昨年10月より少しずつ TAAA のボランティアをはじめました。

TAAA の作業所には全国から送られてきた英語の本がたくさんの箱に詰まっていました。それを大きさや種類ごとに詰めなおすのですが、そこに送られた皆さんの南アの子供たちへの思いがあると考えるとほっこりした気持で感謝しながらの作業になりました。この本を手に取った子供たちに、読書をすることによって豊かな 人間性をはぐくむ心の種がまかれていくことを、またその子供たちが南アの未来を築いていく大人に成長していくことを願わずにはいられません。

今の私の南アフリカについての知識はずっと前に読んだ‘遠い夜明け’の本と映画、サッカーワールドカップの時期の TV ニュースや新聞・雑誌からの情報・・・くらいです。なのでこれから知っていこうと思います。私と同じく‘これからっ’という方がいましたら、一緒にボランティアを始めませんか？毎月第２日曜日　南与野駅徒歩１０分の作業所です。

■ 南アから　　中地 明子

今日ンドゥエドゥエのマシザ校ともう一つの学校、同行させてもらいました。今週の金曜から学校がお休みになるのと、もう既に最後の 試験も終えたということで生徒は少ししかいませんでしたが、プレハブ で設置された図書室（プレハブ図書室は中地さんのイギリスのご親戚の皆さんからの寄贈に寄ります・・編集部）や、改めて新しい本棚が入れられた図書室などを拝見し、TAAA の実績の重みを感じました。

マイケルの運転と薫さんの仕事っぷりは本当に完璧で、それらの偉業も 実感しています。

（写真：マシザ小にて、前列右が筆者、後列右から３人目がマイケル）

エルギン学習基金 訪問記

ジェトロ・アジア経済研究所研究員

牧野 久美子（TAAA 会員）

2010年10月28日、アジア経済研究所の現地調査の一部として、西ケープ州のエルギン学習基金(Elgin Learning Foundation: ELF) を訪問する機会がありました。ELF は、TAAA が西ケープ州に寄贈した移動図書館車、「amaboeke」の運行を行っている NGO です。

ELF のあるエルギン地区は、ケープタウンから「サーローリーパス」という峠道を越えて、車で 1 時間半くらいかかるところにある農業地域です。ELF のストリートアドレスは「9 Appletiser Road」となっているのですが、ELF の敷地の奥には、日本にも輸入されている「アップルタイザー」の本社・工場があるそうです。エルギンは、リンゴやブドウをはじめとする果樹栽培が盛んな地域で、この地域でとれるブドウからは質の高いワインも製造されています。

田舎の小さな NGO を想像して出かけてみたところ、実は ELF は、広大な敷地にコンピュータ研修室、資料室、水泳教室用のプール、研修受講者が宿泊できる寮、ゲストハウス、レストラン、菜園、等々の施設をもつ、大きな NGO なのでした。ELF のスタッフは何と 150～60 名いるそうです。そのうち 40 人くらいが本部にいて、その他の人たちはコミュニティ・ワーカーとのことでした。

TAAA が送った移動図書館車にも対面してきました。鍵のかかるガレージではありませんが、資料室（移動図書館車に積む書籍の保管場所を兼ねる）の前に、屋根のある専用スペースが確保されていて、中にはたくさんの本が、きちんと分類されて並んでいました。移動図書館車は毎週火曜日に、1 日 2 校ずつ、計 7 校の学校をまわっているそうで、各学校からすると、1 ヶ月に 1 回、移動図書館車が回ってくるというペースです。移動図書館車の運行は 1998 年に始まったそうなので、もう 10 年以上、活動を継続していることになりますが、(少なくとも素人目には) 車両の状態はよいように見えました。ELF では、現在は図書の貸し出しがメインとなっている移動図書館車の活動を、ストーリーテリング、読書コンテスト、おもちゃの貸し出しなどへと拡大したいという意向を持っているそうです。

写真： TAAA が送った移動図書館車、amaboeke 号

ELF が実施しているプロジェクトは、教育、職業訓練、保健など多岐にわたりますが、現在、とくに力を入れているのは成人教育に関わる活動（「ELF コミュニティ・カレッジ」）のようです。ケープタウンまで私を迎えにきてくれた運転手のトーマスさんは、昼間は運転手として働きながら ELF の支援で夜間に学校に通い、今年マトリック（高校卒業資格）に合格、さらに電気技師の資格を目指して勉強中で、資格をとった暁には ELF で講師として働くという計画を持っていました。教育や訓練を提供するだけでなく、ELF が雇用機会をも提供しているということが印象的でした。農業以外にめぼしい産業がない地域で、ELF の研修への参加が具体的なキャリアにつながるというのは、人びとにとって参加への大きなモチベーションとなると思います。また、最近では Business 4 Development という、職業訓練と収入創出を一体で行う活動に力を入れているそうです。具体的には、ハーブから抽出したエッセンシャル・オイルを使用した石鹸や入浴剤などバスグッズの製造、近隣のワイナリーの技術指導を受けてのワイン醸造などをしています。いずれも原料のハーブ（ゼラニウム、ラベンダーなど）やブドウの栽培から、製造、マーケティングまでを一貫して実施しています（マーケティングには苦労されているそうですが……)。ELF のワイン醸造を指導しているのはタンディ（Thandi）という、農業分野の黒人経済エンパワーメント（BEE：白人が経済を支配していたアパルトヘイト時代の経済構造を変革し、黒人の経済参加を促進しようという政府の政策）の成功例として有名なワイナリーで、農業を通じた黒人社会のエンパワーメントが、BEE からさらにコミュニティ・プロジェクトへと波及している例として、たいへん興味深く感じました。ELF は、現在、その活動資金の 3 分の 2 を政府から得ていますが、助成金が減少傾向にあるなかで、活動の持続可能性を担保するために、ぜひ Business 4 Development を成功させたいとのことです。ELF のこういった方向性は、いま流